(3) 防災教育を通じて果たしたい願い

畦地：いろいろご発言頂きましたけれども、最後に『これから』について、皆さんからそれぞれご発言頂きたいと思っております。皆さんには事前に、『防災教育を通じて果たしたい願い』を語って頂くことをお願いしております。いろんな果たしたい願いがあろうかと思います。林先生からお願いします。

林：昨日も授業の話をしましたが、防災を学ぶことを通じて、『地域を好き』になったり、自分が『日本人であることに誇りを持つ』、そういう心を育てることを、僕は凄く大事にしているんです。そんな思いで、新宮市にいた時に実際にやっていた授業で、最後に子どもたちに話す内容を紹介します。

「上は関東大震災直後の東京の写真です。下は現在の東京です。同様に、上が阪神淡路大震災、下が現在の神戸の街です。新宮市は、南海地震のときは津波じゃなかった。火事で町の 70%が消失しています。今の新宮市が下です。東京大空襲、大阪大空襲の東京と大阪、現在の東京と大阪です。これは台風 12 号の新宮市ですね。みんなも知っている通り、新宮市も着々と復興して前よりも綺麗な姿になっています。」

「日本人は、地震や津波、台風、洪水、戦争、いろんな苦しいことを乗り越えてきた。日本人は、諦めない強い心と強い精神力と、みんなで協力して助け合う心を持っている。だから、もしここに地震・津波が来ても、生きてさえいれば、必ずよりいいものを作り出すことができる。だから、絶対に生きてのびなきゃ駄目なんだよ。」

授業をやった後、子ども達に必ず感想を書かせています。「地震津波は怖いけれども、日本人の素晴らしさがわかった」とか、「私たちも頑張って命をつなげて復興させたい」というような感想を書いてくれます。

世界で一番優秀だと言われているユダヤ民族。0.2%の人口でノーベル賞の20%をユダヤ系の人が取っていると言われています。その勤勉さと頭脳で、ナチスに嫌われて迫害されたという歴史もあります。ユダヤの人たちは、子どもたちに何を残すか。財産、土地、お金などは取られたほうがいいんだ。一番大事にするのが教育だそうです。教育は命を取られない限り、誰にも取られることがない。ユダヤの帝王学の中に、子どもの時にユダヤ人が必ず子どもに言うことがあるんです。それは、自分のアイデンティティーを高めること。「あなたのおじいちゃんは立派な人なんだ。こんなことをした人なんだよ。あなたのお父さんは、あなたのために一生懸命働いてくれる素晴らしい人なんだよ。」ということをユダヤ人は、子どもが小さい頃に徹底的に教えるんですね。だからアイデンティティーが高い。「俺にもそういう立派な血が流れている」と思える。

日本人ってなんか嫌味です。「あなたのお父さんは素晴らしいのよ」なんて言ったら、何か馬鹿な感じがしますよね。でも、本当はとても大事なことだと思うんですよ。例えば、私がビール飲んで、だらしなくテレビ見ていたとしても、嫁さんは、子どもに「お父さんみたいにならないでね」なんて絶対言っちゃ駄目なんです。でも、結構言ってるんですよね。学校でこの話したら、「うちの親そう言っている」という子どもが結構います。子どもが、奥さんにガミガミ怒られている時に、子どもに「あんな女と結婚するなよ」っていうのも、結構言ってます。けど、これは絶対駄目なんです。じゃあどう言うか。「お父さんは今こういうだらしない恰好をしているけども、外に出たら家族のために、あなたのために一生懸命働いてくれてるんだ。お父さん素晴らしい人なんだ。」と。お母さんがガミガミ怒っていたら、「お母さんの愛は凄く深い。愛情の深い女なんだ。あなたもそういう嫁さんをもらうんだ。」って言わなきゃいけない。

防災と全く関係ないような感じですけど、防災教育で育みたいのは、自分で判断して自分で行動するという『自主性』なんですね。これを達成するためには、防災教育だけじゃなく、全ての教科、全ての子どもとの接し方、指導を根本的に見直してやっていかなきゃいけない。これから、自分もそうやって授業を見直して、子どもの接し方も考えてきたいと思います。

畦地：五十嵐先生、お願いします。

五十嵐：先ほど防災教育の目的を話させて頂きました。そこでも少し述べましたけども、防災教育をやっていくうえで大前提となるのは、地域への関心、郷土愛というものが必要になると思います。それがないと防災教育は大変な教育になってしまう、そんなふうに思います。その郷土愛を身に付けた子どもたちが次に考えるのは、「地域に対して、自分は何ができるんだろう」と、地域貢献を考えるようになっていきます。さらに、「自分も将来この地域を背負って立つ人間になろう」、「コミュニティを引っ張っていこう」というように、いわゆるローカル人材が育成されていく。

これまで私たちは、学校教育の中では、そういった地域の人材育成に対して、結果としてそういうところにつながっていたこともあったかもしれませんけども、それを主目的に教育はしてこなかった。その結果として、皆さんご存知のように、「ほとんどの地方が今後消えていく」という総務省の発表につながってしまった。実際、新潟県内を歩いていると、本当に高齢者だらけの状況です。そういう状況を見ると、ちょっと背筋が寒くなるような思いがします。このままにして本当にいいのだろうか。子どもをどんどん育てて、そして東京に、どんどん人材供給していく。その繰り返しでいいんだろうか、と考えています。

防災教育の本流ではないんですけども、防災教育を進めていくなかで、ローカルな人材を育て、やがて将来を担っていく。その子たちは防

災教育をしっかり受けた子たちですから、地域の防災もしっかりやっていく。そういう子どもたちが地域に増えれば増えるほど、確実に地域は変わっていく。先ほど、「地域との連携において地域は変わる」と言いました。もちろんそうなんですけども、防災教育をしっかりやり続ければ、10 年後、20 年後の地域の変化は、その比ではないと思います。ですから、教育はもちろんのこと、行政も連携して、地域を新たに創造していくことが、今後求められるんじゃないかなと思います。そして、私もそれに則った 10 年後、20 年後を見据えた教育をやっていきたいと思います。

畦地：西本先生、お願いします。

西本：防災教育については、私はやはり『命の教育』が根本にあると思います。『命の教育』は、日常の中から子どもたちが経験あるいは感じてきたことを元に活かされる教育ではないか。「揺れたら逃げる」、「揺れたら身を守る」、「津波が来たら逃げる」、「高い所に逃げる」、こういった日常生活から子どもたちが学んできたことが根本にあって、子どもたちは自分たちの生活をふり返る中で、それらを改めて考えていける題材があるのではないかとは思っております。

そんな中で、自分の命はもちろんのこと、他者の命についても考えていく。そして、何よりも思いやりや優しさっていうものを大切にして、地域のコミュニティの再生を考えていかなければいけない。昔は隣近所のおばちゃん、おじちゃんが、気軽に声を掛けてくれました。具合が悪そうだったら、「どうしたの」と声を掛けてくれました。そこには助け合いがあったと思います。やはり地域のコミュニティの再生がない限り、広がりとか、長続きしていく防災教育にはならないんじゃないか。

そして、その防災教育の発端が、子どもたちからの発信でもいいんじゃないか。子どもたちが発信していく。その一つひとつの取り組みが地域とつながっていく。そして、地域とつながることによって、自分たちの故郷を見つめ、身近にある地域のことを子どもたちが考えていける。そういう防災教育であって欲しいなと自分は思っております。

畦地：松本先生、お願いします。

松本：少し視点が違ってしまうかもしれないんですが、『最近の若い者は』っていう言葉は、古代エジプト時代からあると言われています。私自身、そう言いたくなる年にもなってきています。最近の子どもたちは、いろんな課題はあると思います。家庭環境であったり、経済的に厳しかったりという子どもが圧倒的に増えている。そんな中でも、子どもたちはみんな頑張っています。

一方で教師は、OECD の中で一番日本の教師は多忙で、日本の教育差も最も少ないなど、ネガティブなことも言われています。でも、僕は教師は素晴らしい仕事だとずっと思ってきました。この素晴らしい教師という仕事をしていく中で、子どもたちを育てる中で、自主的にやれる仕事としてやってきた中で、子どもたちにとって明るい未来を伝えるには、どうすればいいかっていうことを真剣に考えられる仕事をしている。そして、それが子どもたちに伝わると、正のスパイラルが綺麗に回っていく。畦地さんが作られた図もそうですけれども、正のスパイラルが綺麗に回っていく。

これはある講演会で聞いたんですけど、「先生方は第二希望ばっかり言ってないですか。『学力が上がる』、『部活でいい結果を残す』、『人を思いやる』、『仲間はずれにしない』、『いじめをしない』。第一希望は何ですか。やはり命なんじゃないですか」と言われました。その通りだと思います。真剣に考えていきたいと思います。

明るい未来を作るために、私たちのやっている仕事、それを子どもたちに伝えることを一生懸命やっていきたい。そのためには、教員が元気でなければいけない。元気いるためにはどう

すればいいのか。行政のやること、管理職のやることがあるんだと思います。

畦地：嶝口先生、お願いします。

嶝口：少し個人的な話になるんですが、21 に阪神淡が起こりました。その時私は 6 生の担任をしていましたが、式の次の日から北淡町に一人でボランティアに行きました。心のケア隊として仮設住宅を回ったんです。いろんなことを言われて、怒られたこともあったんですけども、そこで非常に印象的なことがありました。ある仮設住宅をノックしますと、中から一人のおじいさんが出て来られた。非常に高齢に見えたので、「お一人ですか」と言ったら、「一人で住んでるよ」と。その時点で、私は「可哀想に」という思いになって、「大丈夫ですか」って言ったんです。そうしたら、その方は 94 歳だったんですが、「こんなもんでは、わしは負けない」と。「関東大震災、第二次世界大戦、そして今回の震災。この 3 つをわしは通り抜けて来たから、これからも生き抜く」という話をされました。僕の防災のイメージというか、印象はそこなんです。

少し関係ない話をしましたが、今の子どもを取り巻く状況を考えてみますと、一言で言うと『母性に包まれている』と思うんです。個別の配慮をされて、「辛いことはなかったですか」というアンケートを取られて、あったら詳しく話を聞いてもらえる。そういうことも大事だとは思うんです。もちろんなかったら駄目だと思うんですけども、その逆の『父性』といいますか、先ほどのおじいさんの話じゃないですけども、「何が何でも生き抜くんだ」という強い心を育てる、折れない心を育てることが減っているように思います。

では、それをどうしたらその力が育つのかと考えたときに、僕は防災教育だと思うんです。防災教育というのは、『父性の教育』であって、子どもに強いリアリティを持たせて、人間として厳しい判断を迫る教育だと思います。本当にこれからの学校教育にとって、非常に大事だと思っています。これからもこの教育を続けていきたいなと思います。

畦地：大句先生、お願いします。

大句：小木中学校の防災教育を始めた時の目標に、『防災を小木中の伝統に』ということがありました。また、自分は『防災は日常である』と考え、子どもたちが今まで経験したり、体験したり、または知識として得た中から、「今この時、自分の命をどう守るか」を考えられる人間になって欲しいと思います。

これまでの活動を通して、自分が行動することで、周りの人に伝えることで、周りの人のお話を聞くことで、たくさんの人とつながってきました。活動は何もかもうまくいくわけでもなく、試行錯誤を繰り返していますが、『人と人とがつながる』ことから得た喜びとか達成感は、自己有用感になったり、自己肯定感になったりしているのは事実です。これからの子どもたちにも、そういう体験が自分自身の生き方を支えるものになるんだと実感してもらい、大人になっていって欲しいなと思っています。

畦地：森本先生、よろしくお願いします。

森本：自分自身が今思っていることをいくつかお話させて頂きます。

今、釜石東中学で被災を経験した当時の子どもたちから、もう一回学び直しているところですが、これをもっともっと役に立てていく必要があるんじゃないかと思っています。今日のような協議会だったり、未災地、被災地という空間的な広がりもあると思います。片田先生がよくおっしゃっていた『次の世代』、『文化形成』にどう持っていくか。『未災地と被災地』という言葉を聞いた時に、『被災世代』と『被災を経験していない次の世代』とをどうつないでいくかを考えました。縦と横のつながりを常に考えて

いくなか、今は県の担当者として横につなげようとしていて、それがなかなかうまくいっていない。では、縦にどうつないでいくかということも大きな課題だなと思っています。

その時に、学校教育を核にしていくためには、先生方への研修や教員養成をどうしていくかが大きな鍵になる。せっかく学校の安全が必修化になるので、これを充実させていくのは一つの手だろう。じゃあ何を大学の教員養成のカリキュラムでやればいいか。その原点は、子どもたちから学ぶべきじゃいか。だから、今子どもたちから、「どういう学習が大事なのか」を学んで、その知見を、大学という立場から、教員養成のカリキュラムにどう活かしていけるのかを考えていきたいと思っています。

もう一つ、防災教育を学校教育の俎上にのせていく時に、自分がずっと震災後から引っかかっていたことに、『評価をどうするか』というところがある。防災教育としての評価です。各教科領域では、それぞれの評価はある。防災教育を通じて、子どもたちにどんな力が身に付いたのかを、『災害が起きたときの結果』で最初に評価するのでは駄目なんじゃないか。その前の評価が必要なんですね。災害が起きる前にも、「子どもたちにこんな力が身に付いた」という目安みたいなものだったり、指標があったほうがいいんじゃないのか。今、子どもたちから聞き取っているところから、そういった目安や指標が整理できるんじゃないかと思っています。

そういうものを整理して、縦の時間軸上のつながりと、横の空間的な広がりとを展開していく。そのためには、総合的な戦略が必要だと思うんですが、今、自分は教育学部にいるので、学校教育の立場で考えていければと思っています。

子どもたちへの聞き取りの中で、『生き方』、『キャリア』についても聞いています。例えば、「僕は故郷に戻れないかもしれない。実はずっと農業に興味があった。おじいちゃんの畑や田んぼは今回大きく被災してしまい、鵜住居からも離れてしまっている。でも、やっぱり農業に関わりたい。将来は、国の農業政策に関わっていきたい。そのために、勉強して、農林水産省みたいなところにも入りたい。この災害を経験したので、大きな災害があった時に、農業をどう復興・再生すればよいのか、そういう視点を持ちたい。」という子どもがいます。

また、ある子は美容師になるために今専門学校に行っている。「私はずっと美容師になりたかったんです。震災とは関係なく、なりたかったんです。防災の学習をしたり、震災を経験したりして、今の夢は鵜住居で美容室を開くことなんです。そうすれば、防災とは直接関係ないかもしれませんけど、そこが地域の方々が気軽に集まってくれる場所になるんじゃないか。」と言うんです。その子は被災した後の大変な時にボランティアの方にカットしてもらって、美容師として関われることがあることを知った。何より、私の心を打ったのは、まだ 19 歳の子どもが、「地元に帰って、そこで地域の人たちが集まれる場所を作りたい」と、『地域』のことを考えてくれていることでした。」

「看護師さんになりたい。それは震災前からそうだったけど、震災で強くそう思うようになった。あの時に駆けつけてくれた看護師さんたちの姿を見て、私も災害時にこういうふうになりたい。そして、できれば地域に戻り、地域の医療をやりたい。高齢者の方々の地域医療に関わりたい。」という子もいます。こういった子どもたちを育てていくことが非常に大事だし、それを応援していけるような環境が非常に大事なんだということを、改めて子どもたちから学んでいるというところです。

将来、その子どもたちが、それぞれの場所で、そういった生き方をしていけることが、地方の再生だったり、もしかしたら今後の日本という国の大事な部分になってくるんじゃないかなと思っています。

地域コミュニティの再生というのは、凄く大事な部分だと思っています。故郷を愛するのも、

非常に大事です。この点については、片田先生は震災前から釜石でおっしゃって頂いていました。震災前、釜石には、東京大学の玄田先生という、「釜石の希望をどうつないでいくか」といった『希望学』を研究されている先生がいらしていました。その先生の話と片田先生の話がピンとつながったことがあるんです。それは、地域再生の一つの鍵は、『緩やかなつながり』ということです。『安否札』を配布する時に、「これは緩やかなつながりを起こせるんじゃないか」と思ったんです。緩やかなつながりで、地域がつながっていく。そこにコミュニティの再生がある。子どもが安否札を配った時に、もらった人は、まだもらってない人に、「中学生がこんなことしてくれた」と話をする。またきっかけを得た子どもたちは、地域の人に挨拶するようになる。言われていた通り、緩やかなつながりが広がっていった。

今、首都直下や南海トラフなどの発生が危惧されています。明治三陸の余震として昭和三陸があったんじゃないかという説もあるのに、岩手県では、「大きなのが来たからもうしばらくは大丈夫なんじゃないか」という雰囲気があります。歴史的に見ると、今の子どもたちが生きている間に、必ず次がある。今回だって、「昭和三陸も経験しました。十勝沖も経験をしました。チリ津波も経験しました。そして、今回東日本大震災経験しました」という方がいっぱいいらっしゃるんです。だから、岩手も、防災教育をすることは使命なんだということを、もう一度肝に銘じて、やっていかなければいけないと改めて感じさせて頂きました。

畦地：森本先生からは『地方再生』、五十嵐先生からは『地域貢献するローカル人材の育成』というお話がありました。

「兎追いしかの山」の『ふるさと』という唱歌があります。あの3番の歌詞を知っている方は思い出してもらいたいのですが、あの歌では「志を果たして故郷に帰る」んですね。この歌のように、うちの町からいろんな所へ出て行ってもいい。世界に出て行ってもいい。けれども、「いつかは故郷に志を果たすために、地域に貢献するために、故郷に帰るんだという子どもを作る」ということを、自分たちは目標にしていきたいなと思っているんですね。故郷から出て行く子どもに「ここに残れ」とは当然言えないわけですけれども、どこに住んでも、どの地で生活しても、常に故郷を心に思っていてほしい。そう思うこと自体が、貢献だと僕は思うんですね。『故郷を思って生きていく』、こういう心を子どもたちには育てたいなと思っています。まさしく皆さんのおっしゃられた『故郷愛』などにつながる話だと思いながら聞いていたわけでございます。

そろそろ時間になりますので、まとめにはいりたいと思います。

本日は、これまでの『知識の防災教育』を超えて、教育の本質に迫る防災教育の様々な可能性について、各地で取り組まれている皆さんからご報告を頂きました。いろんなキーワードが出てきました。そして、最後には『果たしたい願い』についてお話を伺いました。皆さんはそれぞれどのようにお聞きになられたのでしょうか。ここで、いろんなキーワードが出たんですけれども、皆さんのお話からもありましたように、何をどう言おうと、防災教育の最大の使命は、『命の教育』です。目の前にいる子どもたちが自然災害で命を失わないために、私たちは教育しているということです。こう考えると、「うちの学校には他に優先すべきことがあります」という理屈は立たないですよね。先ほど、松本先生から「第一希望は何ですか」というお話がありました。一生懸命に第二希望ばっかりやっているんじゃなくて、第一希望である『命を守ること』をやらなくちゃいけない。まさしく、その通りではないかと思うわけですね。

最後に、黒潮町のPRも兼ねてお話をさせて頂ければと思います。今年の11月25、26日の両日にわたって、黒潮町で、『世界津波の日　高

校生サミット in 黒潮』という国際会議を開催することになっております。世界 29 か国から 250 人の生徒が参加してくれます。日本からは全国の約 70 校から 110 人が参加します。

これに関して、今月 8 日、東京都内で主催者である高知県知事と大西町長とで記者発表をおこないました。その席に、和歌山県の自民党の二階幹事長も列席されました。二階先生は、『世界津波の日』の提唱者であり、この高校生サミットの提案者でもあります。この席で二階先生は、「和歌山県広川町の庄屋だった濱口梧陵は稲わらに火をつけて、村人を高台に導いて大津波から命を救った」という逸話、『稲村の火』の話を引用されて、このようにおっしゃられたんです。「梧陵は稲村に火をつけ人の命を救った庄屋というだけでなく、県副知事や初代県会議長、郵政大臣等を務めた大政治家だった。濱口梧陵のように、地震津波に対する知識と行動力を持った人が一人でもいたら、半分の人の命は助かる。子どもたちへの教育は、いかなる啓発や訓練にも増して大切だ。今回のサミットは人の命に関わる問題。皆で真剣に取り組み、絶対に成功させ、貴い命を守る挑戦を続けていかなければならない。」と、非常に強い語句でおっしゃられました。

この話を傍で聞いていて、私たちは片田先生にご指導頂きながら、黒潮町の防災教育の基本は、まさしく命の教育にしているわけですけども、そのことと今回我々が開催しようとしている高校生サミットの開催意義が、僕の中では重なったんですね。つまり、先ほども言いましたが、防災教育を受けた子どもたちは、若者になり、大人になって、やがて故郷から出て行くかもしれない。いろんな海外に出て行くかもしれない。もしその地で災害が起きたとしても、正しい知見と行動力をその子が持っていれば、自分の命だけではなく、周りの人の命も助けることができる。そういうことを二階先生はおっしゃられたわけです。

そう考えますと、児童生徒への防災教育は、その子が大きくなった時に、その未来の彼・彼女本人の命だけではなくて、周囲の人の命も左右する、非常に重要な取組なんだということを、私自身自覚したわけです。私たちは子どもの今の命を預かっていると同時に、その子どもの未来の命、そして、その周囲の人たちの命をも預かっているということだと思います。

そういうことを皆さんと確認しながら、今後の防災教育に取り組んでまいりたいと思います。この 3 年間、片田先生に呼び掛けて頂いて、このように全国で防災教育に取り組む仲間がたくさんいるということに、私は本当に感激しています。いろいろな話をしながら、これまで皆さんとお付き合いさせて頂きました。これからも、このつながりが切れないように連絡を取り合いながら、子どもたちの命を守ることは当然として、防災教育を通じて、いろんな効果を生むような実践をやっていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いしたいと思います。

最後になりますが、本日のパネルディスカッションに参加をして頂きましたパネリストの皆さんに意を込めて、拍手をして、終わりたいと思います。ありがとうございました。